

(2014年10月27日講演)

1. 土壌の見える化がなぜ重要なのかについて

三菱UFJリース株式会社環境・エネルギー事業部
チーフエキスパート 永野敏隆講師

これからお話する内容は、私が横山先生にお会いしてお話を伺った際に、もうこれしかないと非常に納得したものである。

いいアイデアや技術があっても、ビジネスに結び付くものがあまりないし、また良い技術を持っていても、技術者の方はそれをビジネスにすることは苦手である。これに対して私が実践してきたのが ESCO 事業というビジネスモデルである。私は、日本で ESCO 事業の普及について 16 年間携わってきた。

そうした取り組みの中で言えるのは、「技術だけではビジネスにつながらない、金融だけでもいけない。いろんな方が協力し合って儲かる仕組みを作らないといけない」ということである。儲かる仕組みを作らないと、持続可能な社会は形成されない。儲けるというと、何か日本人は悪いイメージを持つかもしれないが、低炭素社会を実現したいのであれば、必ず儲けるという発想から入っていただきたいと思っている。

地方の経済を復活させる、地方をもっと豊かにするために我々としてやることあるだろうということで、ここ 2~3 年突き進んできた。

まず土壌の話をする前に、見える化の重要性について、省エネの観点から少し話をさせていただきたいと思う。日本は省エネ先進国だ、世界で一番進んでいると言われていたが、私の実感からはそうとは思えない。全然進んでいない。進んでいるのはトヨタ自動車とか、新日鉄住金とか、誰もが知っている超優良企業だけである。ほとんどの企業では省エネが進んでいない。それはなぜかと言えば、これが結論であるが、見える化ができていないからである。

自分のお子さんが、学校から通知表をもらってきて、算数の成績が 5 段階評価で 2 だったとする。そうすると、危機感を抱いて、せめて 3 にしようということで塾に行かせるとか、自分で教えてあげるとか、参考書を買うとか、そういう対策を考えると。しかし、省エネの世界においては、その会社、その工場、そのビルがどのくらい一生懸命省エネに取り組んでいるかは全く見えていない。これが、日本の省エネが進まない最大の問題点だと思っている。

例えば大手の電機メーカーの場合、世界中にたくさんの工場があるが、それぞれの工場でどのくらいの省エネが進んでいるか社長も分かっていない。もし、これを見える化し、100 ある工場を順番に順位付けをして最高点から最下位まで並べたとする。そうすると、どうなるか。最下位の工場は恥ずかしくて一所懸命省エネに取り組むだろう。

ここから先はビジネスの話であるが、自分がどのポジションにいるかが分かってくれば、

設備投資なり人や時間への投資をするようになる。逆に言えば、自分たちが積極的に知恵を絞ったり、お金を出したりという行為は、見える化が起こらない限り発生しない。これを私は16年間ひたすら言い続けている。特に所管省庁には担当課長が代わるたびに常に申し上げているが、なかなか話が進まないのが現状である。省エネの中で見える化が非常に大事だというのは、今の一例でご理解いただけたかと思う。

ここから先は、土壌の見える化の話である。横山先生のお話を伺うと、非常に納得する。本日は、このあと松本先生からお話があるが、今まで土壌の見える化をしてこなかったわけではなく、きちんとしてきているが、不十分だったということであると思う。私は、横山先生が行われている土壌評価の仕組みは非常に理にかなった評価システムだと思っている。

この評価システムができることによって世の中がどう変わるかであるが、ここからやはりビジネス的な観点に持っていかなければいけないと思う。

ご承知のように、地方の農地が遊んでいるというか、畑を耕したくても高齢化の影響で休閑地のような形になってしまっているところが多々あるかと思う。では、貸せば良いのではないかということで農地バンクができたが、実際、貸す側の身になってみると、見知らぬ人には貸したくない。なぜなら、先祖代々の大切な土地を見知らぬ人に貸して痩せた土地にされて返されたら困るからである。別の例で言えば、マンションを買ったばかりの人が長期の海外勤務になって、その間に誰かに貸した場合、想定外の使い方をされたらどうしようと思うのと同じである。そういう方に対して、仲介業務ということで保証金を取って、返してもらう時には貸した時の状態に原状復帰して返すようなスキームを作れば、貸すことを躊躇していた人たちも、預けてみようかという気になってくると思う。現在の農地バンクのシステムは、そのような発想が全く抜けている。そこに民間のビジネスチャンスがあるのではないかと思う。

先生が行われているのは、今の農地がどのような状態なのかを微生物の状態で数値化するということである。非常に良い土地、少し前に流行った「奇跡のリンゴ」という映画があったが、あの奇跡のリンゴを生んだのは、微生物が非常に良い状態で暮らしている土地である。病気にならずに良い農産物が収穫できる。病気にならないのはポイントのひとつであるが、おいしい農産物ができる、これが見える化の大事なポイントだと思う。

農地を一般の企業に貸す場合、借りる側の企業は、農地を見ただけでは良い土地かどうかよく分からない。それに対して、ここの微生物は非常に良い状態で育っているというように数値化し、土壌の状態を見える化できれば、借りる側も借りやすいし、良い土地だったら高値で借りるという声も出てくると思う。良い土地を適正な価格で貸して、良い農産物を作って提供していくという循環が生まれる。ただ、そうしているうちに、土地が段々やせていく可能性がある。

ここから先が、また先生の素晴らしいところであるが、このやせた土地を肥やすというか、元の微生物が充満する状態を取り戻すところまで考えておられる。つまり、海外勤務

で空いたマンションを綺麗に内装して貸し、返すときに再び綺麗な状態で戻してもらう、それでお金をもらうということを農地の活用にも十分適用できると思う。また、他のビジネス展開もありうると思う。

やはり、これまでは農地をビジネスライクな眼鏡で見てもらえなかったが、末永く儲かるシステムを構築し、お金を頂いて暮らしていけるようなものにするによって、地方に活気を与え、地方の健全化に寄与することに繋がっていくのではないかと考えている。このような意味で、ビジネスの観点から横山先生が行われていることに非常に注目している次第である。